朝日 俳壇 歌壇

小林貴子選

文人の机小さし一葉忌　（多摩市）金井　緑

綿虫の地球調べてゐる如し　（静岡市）松村　史基

闘病の着地も見えず草の絮　（旭川市）齊藤　洋子

☆ささくれし言の葉かなし文化の日　（東京都練馬区）吉竹　純

持つところ少し残して衣被　（高知市）戸梶　優子

未知の道歩む楽しさ芭蕉の忌　（伊万里市）萩原　豊彦

湿気寒窓に新聞立てて寝る　（岡山市）難波久美子

☆大根おろし辛くて少し蜂蜜を　（蒲郡市）三田　土龍

うっとりと連休しっとりと秋雨　（東京都足立区）豊　万里

月の夜は水琴窟になる地球　（茨木市）瀬川　幸子

【評】一句目、明治期のすわり机を見ると、こんなに小さいものを使っていたのかと驚く。二句目、中空を漂っている綿虫にそんな使命があろうとは。三句目、不安な心、着地点が見えれば楽になるのに。四句目、まろやかな言葉を交わしたい。

長谷川櫂選

朝寒や天使が梯子降りてくる　（小城市）福地　子道

朝刊のはや焼藷の包み紙　（神戸市）栗山　恵子

宇宙より遠き炉の底神の留守　（高岡市）池田　典恵

長き夜や小用三度び夢三話　（太田市）吉部　修一

晩年や本を旅する芭蕉の忌　（愛知県阿久比町）新美　英紀

☆ささくれし言の葉かなし文化の日　（東京都練馬区）吉竹　純

父母もこの産土に七五三　（香川県琴平町）三宅久美子

着し人の亡くてほどくや秋袷　（藤沢市）中川　節子

小春日やはらぺこあおむし読む夫　（大阪市）藤田富美恵

真室川差首鍋といふ寒冷地　（天童市）高橋ゆり子

【評】一席。天使の梯子は雲間からさす太陽光。「朝寒」の季語みごと。二席。新聞の役割を終えた新聞紙。三席。八百八十トンのデブリからわずか〇・七グラム。劫という長い時間を思う。十句目。「差首鍋」という鍋料理があるかと思えば地名。

大串章選

袴着や菊と並びて背比べ　（太田市）岡島由美子

古書街に探す青春枯葉舞ふ　（北本市）萩原　行博

小さき幸点りしごとく帰り花　（高山市）大下　雅子

それぞれに違ふ未来や七五三　（境港市）大谷　和三

投票所に運ぶ秋思の余生かな　（横浜市）瀬古　修治

木枯が突つ切つて行く赤信号　（浜松市）久野　茂樹

綿虫に世の行く末を問うてをり　（塩尻市）長　泰裕

ハロウィンに独りグラスを傾ける　（多摩市）有安　孝弘

秋らしき秋のなきまま行く秋ぞ　（稲沢市）熊谷　有史

吾の夜長君の夜長と合わせたし　（広島市）小泉　健司

【評】第1句。袴着の子が菊と並んで背比べをしている。楽しそう。関東菊花大会の一場面。第2句。古書街を歩きながら読書に耽った青春時代を思う。「枯葉舞ふ」が一寸さびしい。第3句。季節外れの帰り花を「小さき幸」と言ったところが佳い。

高山れおな選

魁も殿もなく秋終る　（和歌山県由良町）藤田　昌幸

名を分けし枯カマキリと見つめ合ふ　（甲府市）辻　基倫子

冬麗や雲の合間を縫ふ光　（ドイツ）ハルツォーク洋子

☆大根おろし辛くて少し蜂蜜を　（蒲郡市）三田　土龍

二人乗りして駆けつける秋祭り　（伊賀市）中森　里江

凩に鳴る魔女たちのイヤリング　（浜松市）尾内甲太郎

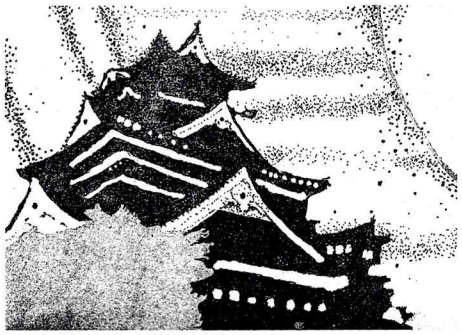
秋の暮選挙の後の静けさや　（岡山市）別府　慶二

落ち込むとピアノ弾く娘や秋うらら　（茨城県河内町）吉村　巌

掃けるものすべて掃きたる秋の空　（福岡市）釋　蜩硯

勲章の俳人二人文化の日　（広島市）谷口　一好

【評】藤田さん。今年の秋は正味二週間程？　表現に切れ味あり。辻さん。お名前はキリコか。キリが共通。ハルツォークさん。「縫ふ」に光が際立つ。十席。高橋睦郎氏と矢島渚男氏。文化功労者に勲章は出ないが、国からのご褒美の意味で。



〈お城〉　岩尾恵都子

俳句時評　井上伝蔵の悲哀

岸本　尚毅

病む母と居るも楽しき年忘れ　逸井

家族が集う忘年の宴だろう。老母は病身だ。そんな母でも、否、だからこそ一緒に居ることが楽しい。「楽しき」の一語が何と生き生きとしていることか。

「逸井」は秩父事件以前の井上伝蔵の俳号だ。蜂起した農民軍の幹部だった伝蔵は、欠席裁判で死刑の判決を受け、北海道に逃亡。伊藤房次郎と名を変えて家庭を持ち、現在の石狩、札幌、北見の各市に住んだ。一九一八年に六十四歳で逝去。その直前に自分の素性を妻子に明かしたという。

秩父の旧家出身の伝蔵は俳句の嗜みがあり、北海道での俳号は柳蛙という。

雲に鳥入るや白帆のならぶ上　柳蛙

海に面した石狩の情景か。〈名月や軒に光りし蜘の糸〉〈風もなき夜やしとしと積る雪〉〈一ツ宛間のあるや雪の鐘〉などは感性のよさと表現の素直さを感じさせる。いっぽう〈思ひ出すこと皆悲し秋の暮〉や〈俤の眼にちらつくやたま祭〉などからは、過去を秘めて生きる者の悲哀を読み取ることも出来よう。

伝蔵は秩父事件の前後で異なる土地に住み、異なる家庭、異なる生業、異なる俳号を持った。数奇な生涯を送った伝蔵だが、日々の暮らしを通じ、その心に寄り添い続けたのは俳句だった。

以上の句は十月刊の中嶋鬼谷「井上伝蔵の俳句」（朔出版）による。本書は俳句の面から「伝蔵」を描出した。前著の「井上伝蔵とその時代」の著者名は中嶋幸三（本名）だった。人間幸三として人間伝蔵を描いた著者は、今回は俳人鬼谷として俳人伝蔵に向き合った。（俳人）

風信

今井恵子著「短歌渉猟　和文脈を追いかけて」「短歌研究」での2年半にわたる連載をまとめ、巻末に「短歌における日本語としての『われ』の問題」を収録。（短歌研究社・3300円）

◇朝日歌壇　入選取り消し　17日付の歌壇に掲載した「手品終えた我を園児が取り囲む魔法使いの役降りられず」は二重投稿だったため、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき